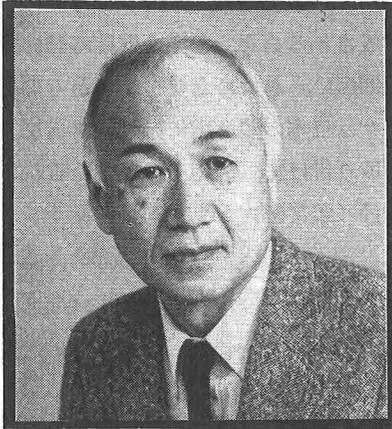


訃 報

田村一郎先生を悼む

松本幸夫（数学教室）



本学名誉教授田村一郎先生は、療養中のところ
去る2月21日千代田区の病院で肝不全のため、逝
去されました。64歳でした。

先生は昭和28年東京大学理学部数学科を卒業さ
れ、同年4月大学院に進まれました。昭和32年東
京大学理学部助手、昭和36年教養学部助教授、昭
和37年理学部助教授を歴任され、昭和42年理学部
教授に昇任されました。以来、昭和62年に停年退
官されるまで、本学理学部数学教室のため尽力さ
れました。また、この間、フランス国立研究所客
員主任研究員、ジョンズホプキンス大学客員準教
授、プリンストン大学客員教授をつとめられてい
らっしゃいます。本学御退官後は東京電機大学理
工学部教授として御活躍中でした。

先生は、昭和32年助手に任ぜられて以来、30有
余年の長きにわたり、主として位相幾何学、多様
体論および葉層構造論に関する広範な研究および
教育に精励され、この方面の開拓者として国際的
に注目される研究を続けて来られました。同時に
多くの幾何学研究者の育成につとめられました。

我が国における微分位相幾何学の発展は、先生の
存在なしには考えられません。

先生は、多様体のポントリャーギン特性類の不
変性や、8次元位相多様体で微分構造を持ち得な
いものの存在に関する有名な御研究をはじめとし、
多様体の微分構造と分類に関する重要な論文を發
表して、発展途上にあった微分位相幾何学の成立
に貢献されると共に、わが国における位相幾何学
と多様体論の育成に尽力されました。その後、当
時最も主要な問題であった奇数次元球面上の余次
元1の葉層構造の存在問題に鮮やかな肯定的解決
を与えられました。これは以後、葉層構造論が世
界的規模で発展する契機となった重要な研究であ
ります。先生はまた、イギリス、フランス、アメ
リカ、カナダ等の国際会議における数々の招待講
演を通じて、位相幾何学研究者に多大の影響を与
えられました。

先生は教育にも大変御熱心で、「トポロジー」
「葉層のトポロジー」、「微分位相幾何学」等の優
れた教科書を著わされました。なかでも、昭和47
年に岩波全書の一冊としてお書きになった「トポ
ロジー」は、現在、位相幾何学への標準的な入門
書のひとつになっております。また、昭和51年に
著わされた「葉層のトポロジー」は世界的名著の
誇れ高く、昭和54年にはロシア語訳が出版され、
現在は英訳の話も進行中であつたとうかがってお
ります。

先生は、これらの御活躍によって、日本および
世界の幾何学研究に多大の貢献をされるとともに
日本数学会理事長、日本数学会ジャーナル編集委

員長等の要職を通じて、我が国における数学の発展につくされました。

東京大学学内行政におきましても、東京大学評議員、理学部長事務代理をつとめられ、理学部および全学に貢献されました。

またわが国の科学行政にも参画され、日本学会議数学研究連絡委員会幹事、京都大学数理解析研究所運営委員のほか、文部省関係では、学術審議会専門委員、大学設置審議会専門委員をつとめられ、永年にわたりフランス政府給費留学生選考

委員もつとめていらっしゃいました。

先生は最後まで数学への情熱を失なわれませんでした。お亡くなりになる直前まで、3次元球面上の力学系に関する重要な予想の解決に向けて精魂を傾けていらっしゃいました。御研究半ばに逝かれた先生の御無念は御察しするに余りあります。

ここに、先生の生前の御活躍にあらためて深く感謝するとともに、心から御冥福を御祈り申し上げます。

高橋（高木）由美子図書掛長



理学部図書掛長 高橋由美子さんは病氣療養中のところ平成2年12月11日医学部附属病院で逝去されました。享年46歳でした。

高橋さんは、フェリス女学院短期大学英文科を卒業された後、慶応義塾大学文学部に編入学され、図書館学を学ばれました。一時読売新聞社文化事業部に籍を置かれていましたが、昭和45年に静岡大学（附属図書館）に任官された後は、ご本人も愛してやむことの無い図書館業務に一貫して精勤されてきました。昭和49年に東京大学附属図書館に転じられてからは、整理課や総務課で仕事をされ、同62年には洋書目録掛長に昇任されました。昭和

63年10月に、新設されてからまだ日が浅い理学部図書掛長に着任されてからは、未整理の規定などの作成から、中央図書館と教室図書室の間の連絡、図書館業務の電算化など山積する仕事を精力的にこなしてられました。一方で図書館学についての勉強にも熱心で、サークル活動やセミナーにも積極的に参加され、他大学にも多くの知己を持たれておりました。非常に明るいご性格で、またお仕事ぶりもてきぱきとされているので、不覚にも周囲の人々は、ご健康を害されていることに気づかず、この度の急なご不幸には、誰もが愕然といたしました。ご本人にとっても図書行政に愛情を持ち、張り切っておられ、いよいよこれからという時に、また学部としても、お陰様にてようやく軌道に乗ってきた図書掛業務が、このような有能な方を失うことで、一時中断を余儀なくされることは残念でなりません。長い間東京大学及び本学部に尽くしてこられたご功績に深く感謝いたしますと共に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（理学部）

高橋（高木）由美子さんを悼む

清水 忠 雄（理学部図書委員会委員長）
（物理学教室）

昨年12月3日（月）の朝、久しぶりに開催される理学部図書委員会のための書類を整えながら、そろそろ最終打合せのために高木さんに連絡しようと思っていたところ、事務部から「高木さんがお加減が悪く先週末入院された」という電話がかかってきて、驚かされました。先週は出張とか聞いていましたので、ご旅行中に事故にでも会われたのかと思いました。出張前に私の部屋にいられて、委員会のための準備を張切ってされていたお姿を思い浮かべても、まさかご病気とは考えつきませんでした。高木さんのいない委員会は、何か中心となるものが欠けたような印象でしたが、ともかくもこれが終り、いずれご容態がよくなった頃に報告がてら病床にお見舞いにかがおうと考えていたところへ追いかけるように悲報がとどき、さらに愕然とさせられました。まさかそんなに悪かったとは予想もしていませんでしたし、やがて「先日は委員会を欠席してすみませんでした」と元気な顔を見せてくれるものとばかり思っていました。

高木さんは長い間の総合図書館勤務から、理学部図書掛長に移って来られました。いわば中央政界から地方議会に移られたようなもので、土俵が違って、何かとお仕事やりづらいこともあろう

かと思い、何回かうかがってみました。ただ静かに微笑んでおられただけで、愚痴など一切言われなかったことが、かえって強い印象として残っています。

高木さんは確かにこのお仕事に情熱をもっておられ、漢語や横文字の専門用語がぽんぽんとびでてくるように、お仕事をてきぱきと片付けられておられました。日頃よく勉強しておられるなど感じさせられました。「理学部貴重図書取扱要項」を起草されたのが、高木さんの最後のお仕事になってしまいましたが、それぞれ性格の異なる学問を進めている各学科から、それぞれそまぢまぢの意見がでてきたものを学部としての共通規則にとりまとめることはさぞや大変なご苦勞だったと思います。大変格調の高い文章で、しかも限々にまで神経のよく行きとどいた立派な「作品」となりました。

理学部の図書掛は設置されてからまだ日が浅いわけですが、ご努力により、ようやくその存在意義も明かになり仕事も軌道にのってきたところで、このように有能な人材を失なったことは学部にとっても大きな損失です。高木さんの学部に対するこれまでのご努力に深く感謝して、いまはただご冥福をお祈り申し上げます。

高橋（高木）由美子さんを偲んで

新谷晶子（情報科学教室）

昨年暮、あの時ならぬ、喘息には特に影響の大きい台風・低気圧が関東地方を襲った中、高木さんはあまりにも突然逝かれました。昭和49年、総合図書館に転任していらした高木さんと同じ整理課で仕事をし、月日がたち、また、理学部でご一緒に図書の仕事をさせていただくことになり嬉しく思っていましたのに誠に残念でなりません。でも、一番、無念に思われたのは高木さんでございましょう。

いつも書類を胸に少しうつむき加減に歩いていた高木さんは、大学という創造的な研究・教育の場で少しでも研究がなされ易いようにする司書の仕事をこよなく愛し、責任感をもって仕事に励んでいらっしゃいました。まだまだ、なさりたいことがおありだったことでしょう。慶応義塾大学文学部で図書館学を学ばれた高木さんは、図書館学の研究に熱心で、ご自身、サークル活動も続けていらっしゃいましたが、理学部図書掛長に着任後まもなく、各図書室にも「大学図書館研究」・「情報管理」等の文献の回覧を始められ、また、参考ツールの整備をされ、私たちが日々の努力を忘れることのない環境を整えることにも心をくだされました。本当に明晰で、要点をおさえた話をなさる方であり、また、「理学部貴重図書取扱要項」

・業務マニュアルの作成など大変な仕事もきちんと進めていらっしゃいました。日常業務に追われがちな私も、「仕事をまとめ、一度、書いてご覧なさい、勉強になりますから。」と励まされておりました。お小さい時から、喘息の発作が起きると、暗い夜、ひたすら辛抱していらしたという高木さんは、その華奢なからだつきからは想像出来ない程、豪快とも言える広い度量の持ち主でした。私などが思いつくままに言う意見にもよく耳をかたむけて下さったお姿が、今も、目に浮かびます。

漢語の多い、きっちりとした言い回しをなさる高木さんでしたが、非常に明るく、情熱的で、チャームングであり、喘息に不安を持ちながらも、昨年、新しく始められたご生活に、私たちもお幸せを願っておりました。暖かな御家族とご一緒にこれからという時に、激しい発作を起こされた高木さんのその時のお気持ちを思いますと言葉もございません。私たちに、仕事の面でも、また、人間的な面でも大いなるものを残して行って下さった高木さんを思い、また、誰よりも高木さんをいとおしく、誇りに思い、支えていらした御遺族の皆様の深いお悲しみを思い、ここに、心より、ご冥福をお祈り申し上げます。